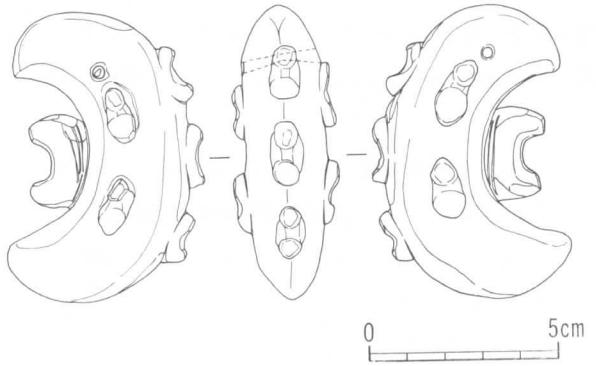


## VI 付 篇

### 子持勾玉（第17図）

横瀧山出土とされる子持勾玉に関しては、寺村光晴・久我勇両先生により紹介済みであるが<sup>(1)</sup>、今回実測の機会を与えられたので報告しておきたい。



第17図 子持勾玉実測図

本例は両端が尖り全体的にバナナ状を呈し、背部に3個、両側面に2個ずつ、腹部に1個の突起を有する。子持勾玉の突起は、その名称通り勾玉に小勾玉状のものが付されたと考えられているが、本例を見ると突起と本体の接合部分を削り込み、突起を小勾玉状に仕上げているわけではない。背部・側面部の突起は長さ1.6~1.8cm、高さ0.4~0.5cm、厚さ0.8~0.9cmである。腹部の突起は長さ2.5cm、高さ1.8cm、厚さ1.1cmと、背部・側面部の突起と比べてかなり大きい。全長は7.7cm、各部突起を含めた幅は4.5cm、厚さは2.4cmをはかる。穿孔は両側面からなされ、孔径は0.4cm。紐ずれ痕は認められない。部分的に黒色の斑点が混じった暗い黄褐色を呈する滑石製である。一部に削り痕をとどめるものよく研磨され、全体的に丁寧な作りである<sup>(2)</sup>。特殊な施文、線刻はなされていない。出土状況などに関しては不明である。

他に、県内では次の8例がある<sup>(3)</sup>。

- |                  |                                      |
|------------------|--------------------------------------|
| (1) 佐渡郡真野町田切字小布施 | (5) 上越市青野梅田新田（富士権現境内） <sup>(4)</sup> |
| (2) 同 金井町新保川東    | (6) 新井市斐太（斐太神社境内） <sup>(5)</sup>     |
| (3) 西蒲原郡弥彦山      | (7) 糸魚川市田伏（奴奈川神社境内） <sup>(6)</sup>   |
| (4) 同 分水町国上字居下   | (8) 同 笛吹田                            |

子持勾玉は、勾玉状の本体に複数の突起を有するという基本的な特徴を有するものの、本体の形状、突起の形・個数には多様性が見られる。現在のところこれらの多様性を整理し、分類し、編年を確立するまでには至っていない。この間に、本体の断面形に着目され、編年観を提示されたのが、佐野大和氏である<sup>(7)</sup>。すなわち氏は、円形→橢円形→矩形に近い厚板状→扁平板状という順に形態変化をきたしたというのである。この変遷は遺構に伴う発掘例からすればほぼ正しいようである。横瀧山例の断面は円形に近い橢円形で、小布施例、国上例と共に古い段階に属している。県外の日本海側地域にも、このタイプの子持勾玉が比較的多く分布している。北では、秋田県由利郡西目村井岡<sup>(8)</sup>、山形県西村山郡河北町谷地沢畠<sup>(9)</sup>、同山形市鶩の森<sup>(10)</sup>、同山形市七浦孤山<sup>(11)</sup>、同東置賜郡川西村中郷<sup>(12)</sup>、一方富山県側に下ると、富山県氷見市谷屋<sup>(13)</sup>、

同中新川郡立山町若宮遺跡<sup>14</sup>、石川県七尾市岩屋町<sup>15</sup>、同羽咋郡富来町高田<sup>16</sup>、同小松市矢田町新丸山<sup>17</sup>等である。これらはすべて断面円形に近く、両端が尖りバナナ状を呈するものである。

年代推定可能な子持勾玉の最古のものは、現在のところ大阪府カトンボ山古墳から出土した4点で、やはり断面が円形、楕円形を呈し、5世紀中頃とされている<sup>18</sup>。このような形の子持勾玉が、日本海沿岸地域に多く検出されている事実は、注意しなくてはならない。同様に古式に属す子持勾玉が、関東、特に霞ヶ浦周辺や朝鮮半島南部から出土していることも注意される。

一方、断面が矩形に近い厚板状で、背部の突起が形骸化して連続的に作られ、波状を呈する子持勾玉が、畿内特に三輪山周辺や九州沖ノ島など限られた地域にしか分布していないことは、子持勾玉を使用する祭祀自体が変化したものか、またはその扱い手が特定されていたことを示すように思われる。

横滝山出土の子持勾玉は、出土遺構や共伴遺物が不明のため、その実態については明らかでない。しかし、今後は基礎資料の蓄積とともに、古墳文化全体の中からその意義を把握していく必要があろう。

(倉林真砂斗)

#### 註

- (1) 寺村光晴・久我勇『寺泊のおいたち一先史遺跡について一』寺泊町教育委員会（昭35）
- (2) 大場磐雄氏のA型第1類に属する。  
大場磐雄『武藏伊興』国学院大学考古学研究報告第2冊（昭37）
- (3) 『新潟県史』（昭58）による。
- (4) 寺村光晴「北陸」『神道考古学講座』第2巻（昭47）
- (5) 後藤守一「石製品」『考古学講座』（昭11）斐太神社御神体の勾玉の中に9個の子持勾玉が含まれていたらしい。
- (6) 関雅之『田伏玉作遺跡』（昭47）
- (7) 佐野大和「子持勾玉」『神道考古学講座』第3巻（昭47）
- (8) 『秋田県史』一考古編一（昭35）
- (9) 川崎利夫「山形県内の祭祀遺跡について」山形考古第2巻1号（昭47）『山形県史』資料編・考古資料（昭44）
- (10) 横戸昭二「山形県鷺の森遺跡について」山形考古第2巻1号（昭47）  
『山形県史』資料編・考古資料（昭44）
- (11) (9)と同じ
- (12) 『山形県史』資料編・考古資料（昭44）
- (13) 西井龍儀「氷見市谷屋発見の子持勾玉」考古学ジャーナル54（昭46）
- (14) 富山県教育委員会『北陸自動車道遺跡調査報告』一立山町土器・石器編一（昭57）
- (15) 川崎澄夫「石川県七尾市出土の祭祀遺物2例」貝塚76（昭33）
- (16) 橋本澄夫・四柳嘉章『石川県羽咋郡富来町高田遺跡調査略報』（昭44）
- (17) 上野与一「石川県江沼郡矢田新丸山古墳出土の子持勾玉」考古学雑誌第40巻1号（昭29）
- (18) 古代学研究会『カトンボ山古墳の研究』古代学叢刊第1刊（昭28）